

大腿骨近位部骨折で周術期にある認知症高齢者の生活機能を重視した療養支援のための看護師教育プログラムの効果

著者	内ヶ島 伸也
学位名	博士（看護学）
学位授与機関	北海道医療大学
学位授与年度	令和2年度
学位授与番号	30110甲第338号
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00064895/

学位論文審査並びに最終試験結果報告書

大学院看護福祉学研究科長 殿

主査 竹生 礼子

副査 三国 久実

副査 鈴木 みずえ

副査 山田 律子



このたび 内ヶ島 伸也 にかかわる学位論文審査並びに最終試験を行い下記の結果を得たので報告する。

記

1 学位論文題目 大腿骨近位部骨折で周術期にある認知症高齢者の生活機能を重視した療養支援のための看護師教育プログラムの効果

2 論文要旨 すでに配布のとおり

3 学位論文審査の要旨

大腿骨近位部骨折で周術期にある認知症高齢者は、不安や混乱をきたし、生活機能が低下しやすい。しかし、急性期医療を担う医療機関では、看護師の認知症ケアに関する知識や経験が不足している現状がある。そこで本研究において、大腿骨近位部骨折で周術期にある認知症高齢者の生活機能を重視した療養生活支援のための看護師教育プログラムを作成し、当該高齢者を看護している病棟の看護師に対して実施、プログラムの効果を検討した。

本研究は、看護師に対して導入研修（介入1）とカンファレンスによる実践支援（介入2）で構成したプログラムを実施する「段階を基礎においた介入stage-based intervention」の効果を、比較群を設定して介入前後比較する介入研究である。介入に対するアウトカム指標として、看護師の「大腿骨近位部骨折で周術期にある認知症高齢者の生活機能を重視した療養支援11項目」実施度・実施内容の自己評価およびカンファレンスでの発言内容、記録類から抽出したその看護を受けた認知症高齢者の「生活機能」の経時的評価を用いている。

本研究のオリジナリティは、教育プログラムとして、知識のレクチャーだけではなく、研究者が臨床の場のカンファレンスに加わって看護師を支援する手法を用いていることにある。研究者が臨床の看護師との相互関係を用いて、実際に高齢者のケアを行っている看護師の理解を深める効果につながった。また、研究のプロセスは、時間をかけて緻密に進められており、発展性を含んだ結果を出すことができている。

審査員より、今後の課題として、基盤理論であるパーソン・センタード・ケア(PPC)の VIPS モデルの適用や PPC に基づく考察、アウトカム指標としての項目の洗練と信頼性・妥当性の検証、介入群・比較群の厳密化や比較検定方法の検討、応用可能性がある教育プログラムの確立について提案された。

4 最終試験の要旨

最終試験は、プレゼンテーション、質疑応答、博士論文審査基準による評価、審議というプロセスを経て行われた。論文内容のプレゼンテーションは、研究に至った経緯から結論に沿って非常にわかりやすいものであり、審査委員からの質疑に対する申請者の応答も適切であった。

審査の結果、本学位論文が新規性と獨創性に富み、認知症高齢者の看護実践に大きく貢献するものであり、今後の発展性も期待される優れた価値を有することを全審査委員が一致して認めた。

以上の結果 内ヶ島 伸也 は、博士 (看護学) の学位を授与する資格が ある と判定する。
博士 (臨床福祉学) ない